

ショートコメント vol.241 (2022年4月21日)

テーマ：欧米で進む「ウィズコロナ」政策

～日本と広がるギャップ。人流の差が消費の回復ペースの差にも～

●欧米で進むウィズコロナ政策

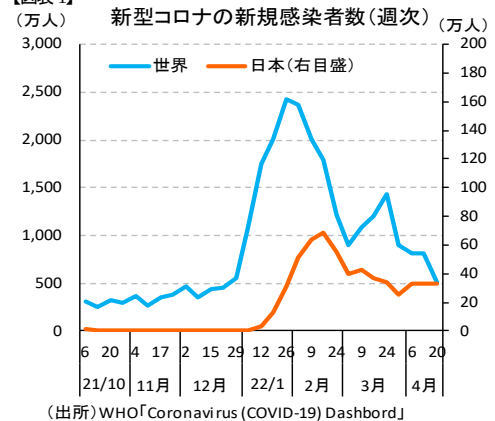
新型コロナウイルスの世界的な感染が続いている（図表1）。

ただ、直近のオミクロン株の感染拡大を機に、各国による対応の差が広がっていることも事実である。

感染力は強いが、重症化率は比較的低いことを受けて、ウィズコロナに政策の舵を切った国も少なくない。たとえば米国では屋内でのマスク着用義務が解除され、フランスではワクチンパスポートの利用も廃止された。

片や日本では、基本的に従来型の対応が続いている。直近の感染第6波においても、緊急事態宣言の発出こそ免れたものの、多くの地域でまん延防止等重点措置が適用された。飲食店への各種規制が行われ、人流も夜間を中心に都市部で大きく減少。結果として消費が大きく減少する形となった。

【図表1】



●国による人流の差

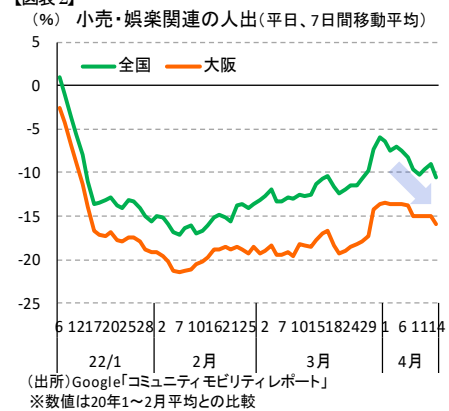
こういった各国の対応の差が、直近の国ごとの人流の差にもつながっている。もちろん国ごとに感染状況が異なるため、差があるのは当然であるが、感染状況が同じような国も例外ではない。

まず日本については、4月に入って新規感染者数が下げ止まり、一部の地域では感染拡大の懸念が広がった。それを受けて、人流はやや減少する形となっている（図表2）。つまり、感染が増えれば人流が減るといふ、従来の関係に大きな変化はみられない。

その一方、欧州ではフランスやイタリア、ドイツの動きが注目される。特に、フランスやイタリアでは3月以降、感染拡大の動きがみられるなど、日本の状況と似た部分がある（図表3）。

ただ、これらの国の人流をみると、4月に入って大きく伸びていることが分かる（図表4、次ページ）。イタリアでは3月に入って感染がやや増えたにもかかわらず、人流はドイツ並みに増えている。やや減少がみられる日本とは、まさに対極の反応といえよう。

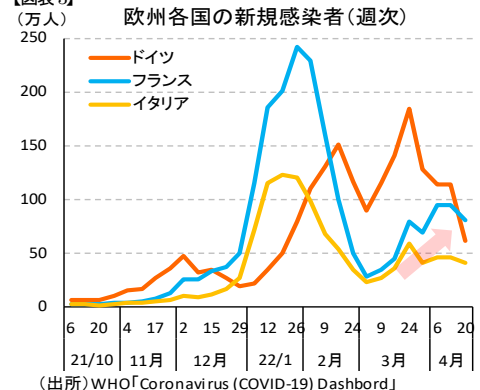
【図表2】



●日本のコロナ対応

なお、足元で人流が減っている日本であるが、現時点で何らかの規制がかかっているわけではない。コロナ禍の長期化により、

【図表3】



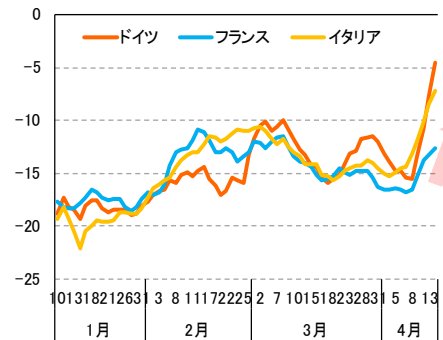
※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点でのものであり、今後予告なしに変更されることがあります。

消費者が感染の増減に合わせて、自分で行動を調整する動きが定着してきた。その結果、足元のように感染が増え始めると、いち早く自主的な行動制限が始まる。これらの動きを見る限り、社会全体でのウィズコロナの意識は欧米とは大きく異なる。もちろんこれは本来、政府の政策と連動するものであろう。

現時点では、感染が拡大すれば何らかの規制がかけられることになる。また陽性者のみならず、濃厚接触者にも一定期間の自宅待機が求められる。これではウィズコロナの機運は高まりにくく、消費者の行動も変わらない。

一方、欧米では着実に人流がコロナ前に戻る動きが進んでいる。新たな変異株の発生も懸念される中、先行きの不透明感は強いが、日本との差は時間とともに広がろう。これは消費の回復ペースの差とも言い換えられる。日本はすでにコロナ禍からの景気回復につき、海外に大きな遅れをとっている。今後はさらに差が開きかねないだけに、今後の状況が懸念されよう。

【図表 4】
(%) 小売・娯楽関連の出入(平日、7日間移動平均)



(出所) Google「コミュニティ モビリティ レポート」
※数値は20年1~2月平均との比較

本件照会先：大阪本社 荒木秀之
TEL：06-6258-8805 mail：hd-araki@rri.co.jp

※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点でのものであり、今後予告なしに変更されることがあります。